【書評】

松下佳代編『ミネルバ大学を解剖する』

岡村 亮佑

1. 本書の構成

本書は、米国の小規模リベラルアーツ大学であるミネルバ大学の教育について、大学教育学の観点から包括的に分析を行ったものである。ミネルバ大学は、授業は全てオンライン、世界7都市をめぐるグローバル・ローテーション、世界中からのオンラインによる無料かつ平等主義的な入学者選抜など、「世界で最もイノベーティブな大学」として日本でも近年衆目を集めている。その内実に関しては、ミネルバ大学の関係者や現役のミネルバ生などの働きかけもあり、書籍やYouTube等のメディアでの情報発信がなされている。

他方で本書は、主として大学教育学を専門とする研究者らによる数年来のケース・スタディの成果であるという点で、そうしたミネルバ大学に関する情報発信とは、一線を画す。著者らは、ミネルバ関係者による著作・論文に関する文献調査、学生・教職員・関係者25名への計35回のインタビュー調査、ミネルバ大学ブエノスアイエス校と台北への現地調査を経て、ミネルバ大学の計画されたカリキュラムだけではなく、実践されたカリキュラム、経験されたカリキュラムの層までをも明らかにしようとしている。その際、上記のようなイノベーティブだが表層的な要素を取り上げるだけではなく、ミネルバ大学がHCs（habits of mind & foundational concepts：知の習慣と基本的概念）というコンセプトを武器に汎用的能力の育成を試みているという点に着目する。つまり、高等教育において汎用的能力を身につけることはできないという見解に対する挑戦としてミネルバの実践を意義づけ、領域固有の能力を超えた汎用的能力の育成は可能なのか、ある文脈から別の文脈への遠い転移は生じうるのか、一般教育と専門教育はどのような関係にあるべきかといった、教育学の古典的論点を切り口にその全体像の解剖が試みられている。本書の構成は以下のとおりである。

序章　ミネルバ・モデルとは何か（松下佳代）
第1章　目標とカリキュラム（田中孝平）
第2章　学習評価（石田智敬）
コラム　評価情報の集約によるプログラムレベルの学習成果の得点化（斎藤有吾）
第3章　授業法（大野真理子・渋川幸加）
第4章　準正課・課外活動（佐藤有理・大野真理子）
第5章　教職員（岡田航平・大野真理子）
第6章　学生からみたミネルバ（田中孝平・大野真理子・岡田航平・石田智敬）
エッセイ　ミネルバ大学訪問記（松下佳代・石田智敬）
終章　ミネルバ・モデルの日本の大学へのインパクト（松下佳代）
付論　ミネルバ・プロジェクトの動向（松下佳代・田中孝平）

序章では、ミネルバ大学の概要紹介や本書の研究方法論の提示に加えて、本書の切り口である汎用的能力をめぐる論点の整理とミネルバ大学における汎用的能力育成の方法が示されている。本書では、ミネルバ大学を構成する各要素を相互に関連した一つの系とみなし、それを「ミネルバ・モデル」と呼んでいる。序章からは、HCsを核とする汎用的能力の育成がミネルバ大学のカリキュラム、授業法、学習評価にどのように浸透しており、一貫したミネルバ・モデルが形作られているのかの見通しを得ることができる。

第1章から第5章までは、序章で提示されたミネルバ・モデルの各要素がどのような成り立ちをしており、そこにはいかなる特質があるのかが、各章のテーマに沿って論じられる。それは、各々がミネルバ・モデルを腑分けし全体像を分析的に把握する役割を担うとともに、個々の独立した章として各章の問題領域に対する論点を提示するものとなっており興味深い。たとえば、

第2章では、ミネルバ大学の学習評価の特徴が①約80個のHCsという学習目標を単位に評価を行うことを重視する点、②HCsは4年間縦断・横断的に評価され、その成績評価は卒業時に与えられる点と端的に整理されているが、①の点からは、評価対象とする一まとまりのパフォーマンスをどの粒度において設定するか、②の点からは、パフォーマンスの評価かコンピテンスの評価かといったより一般的な論点が浮上する。パフォーマンスを評価するとはどういうことかという大きな問いの中で生じる論点と、それに対してミネルバはどのような回答を与えたのかを把握することができる。

第6章では、インタビュー調査のうち特に縦断的に調査が行われた4人の日本人学生A、D、E、Gに焦点を当て、彼・彼女らの経験されたカリキュラムとはどのようなものだったのかが論じられる。彼・彼女らの語りが一定量を伴って直接引用され、必ずしもミネルバを礼賛するだけではない語りにより、ミネルバに通う学生の理知的さや気質が文面からも感じ取れる。

本書に埋め込まれたコラム、エッセイ、付論もミネルバ･モデルを多層的に理解することに寄与している。

最後に終章では、これまでの解剖作業を経て、実践されたカリキュラム、経験されたカリキュラムの層においてもミネルバ・モデルが汎用的能力の育成に一定の成功をしていると結論づけられ、ミネルバ大学が日本に与えつつある影響、ミネルバ・モデルから導き出される示唆や導入時における懸念点が整理されている。

2. 本書の意義と論点

これまでの記述からも、本書の意義は十分に伝わると思う。だが、とりわけ評者が卓越していると感じるのは、計画されたカリキュラムだけではなく経験されたカリキュラムを縦断的に追跡している点、正課だけではなく準正課・課外活動の分析もなされている点、教員と学生の両視点から大学が把握されている点、教育内容と教育経営の両方からの分析がなされている点など、ともすると片面のみの検討になりがちな諸側面に対して両側から多角的な検討がなされていることであった。この点において、本書は事例研究の模範を示している。ミネルバ・モデルが汎用的能力の育成に寄与しているという筆者らの結論は説得的であり、それは通読して得られる立体的な事例の像に立脚している。

続いて、評者の視点から本書を読んだ際に喚起された論点を示したい。第一に、本研究の情報源でもあるミネルバ生の特質を把握することが求められるのではないか、言い換えればある一定の傾向性を有するミネルバ生もまた、ミネルバ・モデルの一側面ではないかと感じた。学生Eは、ミネルバ生を「みんなすごい個人主義」(p.223)と評している。また、第6章を通して紡がれるのは、ハードな環境に対する一定のレジリエンスがあり、そうした環境を乗り越えることに意義を感じる4名のミネルバ生による主観の物語である。無論、「とんがった大学」であるミネルバ大学に惹かれたミネルバ生に一定の傾向性があることは当然である。ただ、そうしたミネルバ生の傾向性から語りを相対化すること、そうした学生を前提とするからこそ成立するミネルバ・モデルの側面を明らかにすること、示唆を得る際には、日本の学生とは学生像が異なるからこそ留意すべき点に自覚的になることは重要である。

第二に、ミネルバ・モデルが内在的に抱える課題に関しても、考察を深めたい。特に筆者の関心を引くのは、編者である松下も指摘する社会への「抵抗」の側面が希薄なミネルバ・モデルの危うさである。英国のジャーナリストであるデイヴィット･グッドハートは、地理的条件を超えて社会の中で流動的に活躍でき、主にエリート層である「どこでもいい派（Anywheres)」と、地元に密着した職業や暮らしが基本であり、傾向として学歴や社会階層が低水準にある「ここしかない派（Somewheres)」との分断を指摘する。どこでもいい派は、国境を超えて活躍することはできるが、国内のここしかない派との壁を超えるのは難しい（Goodhart, D., *The Road to Somewhere*, Penguin Books, 2017)。たしかにミネルバは世界を旅して世界に働きかける。では、その旅は、どこでもいい派だけではなく、ここしかない派とも対等に向き合う素地を有しているのだろうか。

本書の分析は、こうした会話を触発する契機ともなる。同じく東信堂より刊行の松下佳代監訳『ミネルバ大学の設計書』(2024年)も合わせて一読をすすめたい。

（東信堂刊　2024年9月発行　A5判　328頁　本体価格3,200円）

（日本学術振興会特別研究員・博士後期課程）

受理　2025年2月20日